

受け身としての大亞洲主義

趙軍著

中国における大アジア主義

「聯日」と「抗日」のあいだ

片倉 芳和



A5判 376頁
ミネルヴァ書房
[本体 6,000円 + 税]

大アジア主義は『大辞林』（一九八八、三省堂）によれば次のように説明されている。「近代日本に現れた、欧米列強の侵略に対してアジアの一体性や団結を説く主張・理念。植木枝盛や大井憲太郎、岡倉天心、宮崎滔天らによって主張された。

自由民権運動の衰退、国権論の擡頭のなかで、次第に日本を盟主とするアジア諸国の団結という主張へと変化し、その後の日本のアジア侵略を合理化するものとなった」。先ず大アジア主義について基本的意味を理解して本書を読んでいくことが良いと思う。著者は次のように指摘する、「孫文は大アジア主義者であると言えるが、日本流の大アジア主義者ではなかった」との一言で総括できると思う。この意見を持つ研究者は一九八〇年代以降中国の歴史学会に徐々に増え、現在、新しい「定説」になっている。前者『大アジア主義と中国』

では日本の大陸浪人について研究したが、本書は大アジア主義に対する中国の対応に更に踏み込んで執筆されている。

第一章は第一節～三節では日本では明治四（一八七一）年七月二十九日（清では同治一〇年）に調印された日清修好条規における外交交渉についての研究である。日清修好条規の成立に関する外交交渉は両国の世界観の対立が描かれている。清朝の有力指導者たちの外交交渉について日本についての意見が十分に引用されていることを評価したい。しかも日本人読者に良く理解出来るようにいわゆる書き下し文があり分かりやすい。李鴻章について次のように指摘する、「…戦略的な意味で日本との提携、すなわち、「聯日」政策の実施を提言した」、さらに「…言うまでもなく、日本からの「危害」が西洋以上の危害を中国にもたらす場合、「拒日」も彼の視

野内に入っていたと推測できる」。

第二章では上海で発行された『申報』により一八七〇年代から九五五年までの中国での日本観について論述している。中国にはアヘン戦争以降の海外事情の把握、海外理解の重要性について一部の官僚や知識人に認知されてきたが、実施には三つの困難があったことを著者は指摘する。(一) 情報源の限定、(二) 観察者個人の見識と分析能力における差、(三) 伝統文化・思维(たとえば「天朝上国」思想など)と周りの社会環境による制限。『申報』の論客らの最も重要な宣伝対象は「一般の国民」と「世論」である。「一八七〇年代から一八九〇年まで『申報』における日本認識の変遷史を概観し、この三つの難問はいかに近代中国の日本認識とアジア認識の趨勢と限界を規定していたかを痛感できる。」「執筆者の『申報』のここでの議論には、日中両国の実情に対する把握はまだ不十分なところがあると感じるものの、戦前と戦中の言論とを比べると、理性と冷静さが次第に戻ってくることは分かる。特にその中に言及した中国側の敗因の一つとして「中国は用兵の機宜に暗く、また軍の心が堅固ではなく、敵情を知り尽くしていないのだから、日本に對抗できないだけでなく、日本より小さな国にでも敗北するだろう」という指摘は、これまでの世界認識・日本認識の不足に対する反省

とも言えよう。一度頓挫した「日中提携論」は今度、双方の反省に歩み合おうとする努力の前提のもとで「僥倖の勝利でおごり高ぶったり、敗北を恨みに思ったりすることなく、猜疑と前嫌をすべて水に流し、友好を厚くし自強を図ってアジアの大局を維持」するとして再び提起された。これより、中国側の「中日提携論」と日本への認識も少しずつ成熟していると確認できる」。

第三章で取り扱う「中国留日同学会」についての表は九頁の長さに及び一九人の人物の①出身地および留學歴、②日中戦争までの経歴、③日中戦争中の経歴、④特記事項、で纏められた「経歴一覧」は評価できる。「中国留日同学会」についての研究は、管見の限り見当たらない。著者は次のように述べている。「留日同学会はちょうどこのような環境下、このような政策指導下で設立され、活動を行ってきた組織であり、そして、ほとんどすべての面において、日本占領当局および汪兆銘傀儡政権の政策要請で動いていた組織であると言える。彼らの宣伝活動と「事業」活動は、どれも「擬似的共同利益」のもとでの議論と行動であり、結局、「大亞洲主義」が持つ「落とし穴」に陥っていくことになる」。

第四章は「近年、高齢化しつつある植民地支配史の当事者たちを対象として、台湾中央研究院近代史研究所・台湾史研

究所などの諸研究機関は、存命中の「満洲国」に行った台湾出身者や中国大陆に行った台湾出身者、台湾の女性たち及び台湾出身の元日本兵たちに対して口述調査を行い、関連する口述調査報告書を多数刊行した。半世紀以上の年月を経た数十年後の回想録とは言え、様々な実例と生き生きとした実体験が豊富に盛り込まれた第一次資料として、独自性のある貴重な価値を持っている。」という。著者は本章の研究を次のように評価している。「植民地支配の歴史は、日本の敗戦から七〇数年が経った現在、宗主国の日本及び植民地にされた諸国・諸地域の国民にとってすでに次第に色褪せてゆく遠い歴史の記憶になりつつある。しかし、植民地時代の実体験は世代の交代につれて弱まっていきながら、文化的・思想的な遺産としてより強い生命力を持つて社会全体に染み込んでいく傾向も確認できる。そして、ネット社会とマスコミの著しい発展に伴って、歴史の記憶は繰り返し「再発見」「再発掘」され、変型しながら未来世代に様々な影響を与えている。植民地時代に日本式の教育を受けて成長した台湾出身者・中国人留学生はその後の日中関係史に大きな足跡を残している。彼らの実体験に対する検討を通して、植民地における学校教育・社会教育の実態、近現代中国社会における日本認識及び対日世論の形成過程などの課題に対してもまた深い認識を得るこ

とができただろう。また、彼らの自らの体験を通して、「大アジア主義」とりわけ当事者たちが暮らしていた、いわゆる「大東亜共栄圏」時代において、「支配者」と「支配された者」を問わず、人々の理想と現実はいかに乖離していたかを確認できたと思う」。

第五章は中西功の生き方を通して時代を研究している。著者は「中西功現象」という言葉を使っている。「中西功現象」という言葉は初めて聞く言葉なのでおそらく著者の造語だと思う。著者は次のように説明している、「一人の外国人、とりわけ当時ちょうど中国侵略戦争を展開していた「大帝国日本」の国民として、祖国が引き起こした戦争に反対して侵略している中国の民衆を支持することは、大きな勇氣と良識を要する行為である。日中戦争中、中国国内で展開された反戦運動も様々な形で行われたが、研究者という特別な身分を利用して情報と宣伝の面で中国民衆の抗日戦争を支援していた中西功及びその戦友たちの活動は、やはり特異な存在である。分析の便宜上、あえてこれを「中西功現象」と名付けて、中西功及びその戦友たちの思想的背景と心理的要因・社会的環境を探ってみたい」。「中西功現象」の誕生を次の三つとしている、「まず、「中西功現象」は、日本の社会主義者・共産主義者の一部が、日本国内での活動の基盤と生存できる環境を

失ってから、海外へ活動の新天地を求めようとした傾向の結果誕生したものと考えられる」。「次には、中西功らの政治理念・信仰が中国共産党の国内外の政策と共鳴できたことも、「中西功現象」の誕生のもう一つの要因である」。「さらに、中西功の個人としての人間性、国境・民族間の溝を度外視した国際主義的な理念は、「中西功現象」を誕生させた個人的な背景となっていることも注目すべきである。これは「中西功現象」の誕生に関わる三つ目の要因である」。

終章は「一」「夢」に止まったワケ——「大アジア主義」に潜んだ「落とし穴」——、二 受け身として大アジア主義の諸形態、から成り立つ。そして「受け身としての大亞洲主義関係図」があり本文の内容を図により分かりやすく整理して説明している。（参考のため文末に掲載する）。「実際、雑然としていて、まとまりのない「大アジア主義」は社会を動かす政治理論としての構造的欠点があまりにも多く存在しており、至る所、認識の誤差や誤解を誘発している。如実的な言葉で表すと、「大アジア主義」には多くの「落とし穴」が潜んでいると言えよう」。「まず、一番目の「落とし穴」は、「民族主義」「ナショナリズム」に対する認識の誤差・誤解である」。「二番目の「落とし穴」は「アジア共同体」のアプローチ手法に対する認識の誤差・誤解である」。「三番目の「落とし穴」

は、共同利益への認知・誤解である。」本書で取り扱った「満洲国」に赴いた台湾の若者たち、「中国留日同学会」について次のように記述する。「…おおよっぱに分類するならば、救いがたい、幼い政治的感覚の持ち主か、下心を持っている政治的投機者、のどちらかである。植民地教育を受けて宗主国の政治的宣伝を信じ、「満洲国」に赴いた台湾の若者たちには就職・賃金など個人的な打算も確かに重要な動機だったが、「大アジア主義」に対する彼らの理解は、まだ表面的な浅い認識であり、その多くは「幼い政治的感覚の持ち主」の部類に分類できる」。「一方、「中国留日同学会」の多くのメンバーたちの場合、ハイ・レベルの教育を通じて身に着けた教養・知識、豊富な社会体験から得た政治感覚、「淪陷区」（日本軍占領地域）の現実を通して知り尽くした「亡国の民」が置かれた立場の辛さ等々、どれも彼らを「東亜新秩序論」や「大東亜共栄圏」の「建前」と「本音」を見分ける能力を持たせるに十分な知的材料であった。しかし、あろう事か、彼らはそれを承知した上で「中国留日同学会」の趣旨に賛成し、諸事業の展開に「協力」したのである。「政治的投機者」と分類すべき人々であろう。日本の敗戦後、彼らの多くは中国で「漢奸」として人格から否定され、今日まで近現代日中関係史上の日中双方にとっても触れたくない「恥部」として存在して

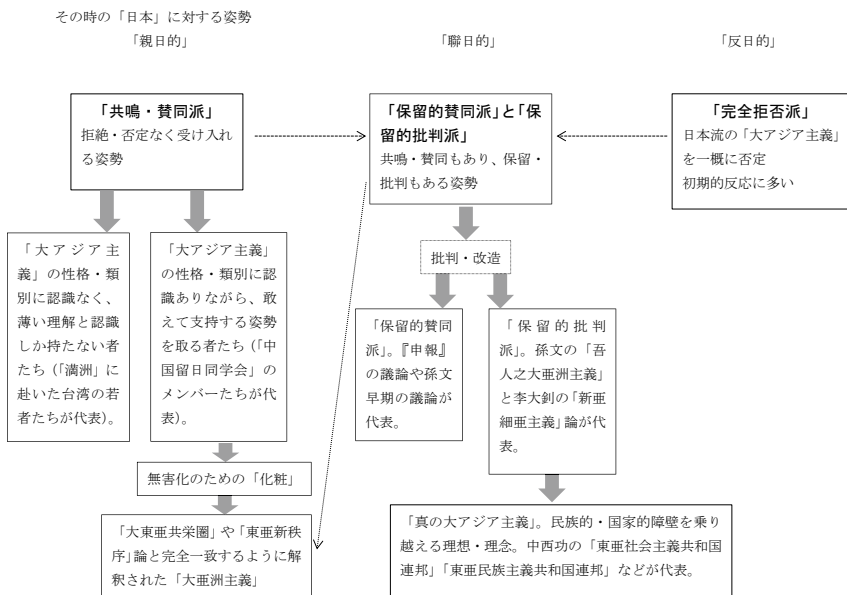


図 受け身としての大亜洲主義関係図

いる」。詳細な紹介は本文を読んでもらうことにして、著者が評価する三名の人物に関する説明を引用したい。「なぜなら、孫文、宮崎滔天、中西功らの考え方のなかに、「天下為公（天下をもつて公と為す）」という「全アジア・全世界」的な視点・心があつたからである。「天下」つまり、世の中は権力者の私物ではなく、「公（そこに暮らす全ての人々）の為のものである」という信念は、二一世紀初頭のいまの世の中よりも先読み、先取りした素晴らしい理念である。いまになっても世の中に横行している民族的対立・民族差別、戦争や紛糾などのトラブル、障害を乗り越える道を提示した理念なのである。「天下為公」は、「亞洲夢」の完結型とはいえないかも知れないが、努力・奮闘すべき方向を指示してくれた大変重要な意義を持った理念であると言える。」本書の紹介ばかり述べてきたが、著者が日・中両国史料に精通していることによって本書の上梓が可能となったことを高く評価したい。

（かたくら・よしかず 日本大学史学会）